

部落問題文芸作品選集

第28卷

坂市

巖著

育ち行く雑草(下)
部落の母

世界文庫版

部落問題文芸作品選集 第二八卷

定価は箱帯に表示

昭和五十一年一月八日発行

発行者

松本富夫

発行所

株式会社 世界文庫

東京都目黒区洗足二一二一五

電話 〇三(七一六)六一五一(代表)
(七一三)九二四四

振替 東京 七八四九八番 千一五二

落丁、乱丁本はお取替えいたします。

第三部

一

富山県から消防署へ帰ってくると、独身寮は解散し、豆野はとくに消防をやめ、京神寮の広子も郷里へ帰っていた。署内は何もかも変わってみえた。進はスエの家に一時身を寄せて通勤することにした。

終戦は日本を根底からゆりうごかした。無条件降伏。アメリカ軍の進駐。秩序がなくなり困乱がおとずれた。焼跡には闇市がたち、インフレがおしかぶさってきた。物資は欠乏し、飢饉が蔓延しはじめた。だが、もうあの戦争中の重圧感はどこにもなかった。民主主義が教えられ、苦渋のなかにも生きていくことの解放感があった。それまでは言葉にもだせなかったことがおおびらになり、ちょうど、春になれば草木が芽ぶくように、ひとびとはあたらしい日本をみつめはじめたのだった。

晴れた非番の日であった。入口の脇でスエが洗濯をしていると、一通の手紙がキリキリと舞って庭におちた。進が庭におりて拾ってみると、悦子からの手紙であった。

進は上り口に腰かけて手紙を取り出し広げて見る。

「拝啓」

貴方にはお変わりありませんか。私も美恵も元気で暮して居ります御安心下さい。伏木に居られる時田舎に来られると思つて楽しみにして待つて居りましたのに残念でなりませんでした。しかし貴方のお手紙でお困の為と分り仕方がないとあきらめました。でも私は大きくなつた美恵を一度見てはしかったです。美恵は良く走りまわるのでらつとも目を放しません。口も良く廻るようになり私をアーチンと呼ぶようになっています。トウチャンと喋らそうと思つておしへますが貴方がそばにいないと駄目です。それに最近、目と言ひ鼻と言ひ手の恰好から足の爪の恰好までにくらしい程貴方に似て来ます。此の前も、いつも村の人に頼むのですが、私がお米の配給を

取りに宇出津まで行った時でした。町の駄菓子店で休んでいますと店の前を馬車が勢いよく通ったのです。すると、馬車を始めて見る美恵は背中にしがみつき火のついたように泣きました。やっと泣きやんだ時です、お店に電気がパツパツついたのです。これも始めて見る美恵は目をぐるぐる廻して背中にしがみつきのです。いつ戦争が終ったのか分らぬ山奥で育ったのですから無理もないと思います。そこで貴方にお願ひがあるのです。こんなことを言ったら貴方が心配すると思つて知らなかつたのですが、私達は田舎に來た時から配給だけで生活しているのです。百姓の伯父と言つても水臭いものです。村の人でも疎開者には冷たい目で見ます。終戦になつて尚更です。貴方御願ひです。どんなつらいことがあつても辛抱しますから一日も早く迎えに來て下さい。御待ちします。ではお鉢に氣をつけて下さい。

美恵のお父ちゃんへ。

さようなら。悦子。

彼の胸はぎゅっとしめつけられた。早く大阪へ呼び寄せてやりたし。しかしアパートも賃れない今の経済状態では急に実現出来そうもない。

「誰から來た手紙？」洗濯するスエが聞く。

「悦子から。」

「何て書いてあるのや？」

「大阪へ早よう帰りたい言う手紙や。」

「そうやけど進、いま大阪へ帰つて來たら食べ物に困るし、もう暫く田舎にいた方がええのと違ふ。」

「わしもそう思つていたのや、それが、伯父が水臭い人で、田舎にいなが配給だけで暮しているそうやねん。」

「え、そんなか。田舎でそんな不自由な暮らしをさせているのやたら、まだ大阪で暮した方がましや。それやたら早よう呼んでやらんと可愛相や。」わしかて美恵の顔を見たいし。

「呼び寄せるにしても住むことや。金を握らんと探されんし。物価はどんどん上るのに、消防の安月給ではな。」

末は立ち上ると、濡れ手をビュービューと振り、大きく肩で息して進に向つた。

「この家もうちよつと広かつたらな、一時ここに呼んでやつてもええのやが。あーそうそう、進。きのう飛田通りで哲雄さんに逢うたのや、あの子、西浜が焼かれてから飛田通りで靴店を出しているそうやね。それで、今職人が居らいで困っているそうや。話の中でな、お前の非番の時店に來て仕事してくれへんか、聞いてくれと頼まれているのや。丁度ええ話や。非番の時甲皮をして一文でもよけい金を儲けて、早よう田舎から呼んでやらんと可愛相やで。」

「甲皮するだけでは追いつかん。わし蜜柑の買出しでもして闇市で売ろうと思ふのや。数倍はなるそうやし。」

進は、署員の一人が非番の時、普通ならならばねば乗車券が買えないのを、消防手帳を利用して和歌山へ蜜柑の買出しに行つて、闇市で売つて儲けているのを思い出し、自分も消防署に内緒でやつてみたくなつて言つた。

「お前に買出しが出来るのか？」

「やるで、家一軒貸りるまでやらんとどうする。」さて実行してみると非常な重労働であつた。列車の乗車は手帳の顔

が利いて訳なく改札口を通る。和歌山で買った蜜柑をリックサックがはら切れる程詰たのを背負い、まだ風呂敷にどっさり入れたやつを両腕でしっかり抱え込んで、蜜柑の買出し客の満員の列車に揺られ、天王寺で城東線に乗りかえ大阪駅迄出て東出口前の薄暗い広場で、混雑する闇商人の中に交じって売れ放題の路に新聞紙を広げ、蜜柑を山にいくつにも積んで売った。蜜柑は二三時間で売切れた。腹の減るのが激しいので闇市で補給して、闇煙草を吸ったりすると、始めの胸勘定より儲けは少なかった。それでも、哲雄の資金の安い甲皮をするよりずっとましであったし、面白かった。

二十年も、編毛糸をときほぐすように過ぎて行く。二月の膚もしびれ底冷えのする晩である。

進の蜜柑の買出しは非番の時以然とつづいていた。そして無断欠勤もしばしばつづいたのであった。今晩も大阪駅の玄関口の脇でやっと売切った彼は、空のリックサックをかたげ家に帰らず闇市で夜を明かしその足で出勤する肚で、東出口前の広場で毎晩焚火し商売をする顔馴染の親父の許へ、寒さしのぎに向かった。

めらめら燃える焚火の周囲には、夜汽車の時間待ちの旅行者、商いを終えた闇商人、闇市を訳もなくさまようざつこのうを掛けた復員風の男とか、前に屈んだり、後向きになったり、頬に纏う煙をよけ斜めになって手を差し延ばし、たむろしていた。こうした、定められた場所の焚火屋が雑踏する闇市の中であちこちで見られた。

いく日も風呂に入らぬ煤けたばさばさの頭髮から、鼻、頬にかけ黒い真綿のような髭に覆はれた焚火屋の親父は、重ねた短い柱木に腰かけ、棒で焚火の中を騒き廻しては、背後に積み重ねてある雑多な屑木をほうり込んでいた。壁まで煤けた顔に黒目勝ちの大きな腫に炎がキ

ラキラ光る。彼の風貌は丁度、丹下左善の映画に出てくる蒲生秦軒を思はせた。

「おつさん、あなたじてや。」進は、親父の横にリックを敷いて、立膝して座った。親父の体臭が鼻をひくひくさせる。

「あたり、もう全部売ったのか？」

「うん。」

彼はジャンバーのポケットから、売れ残ったはんばの蜜柑を四つ取り出し親父に差し出した。あたり賃になっていた。

「これたべ。」

「いつも済んだ。」

親父は、毛むじやらの汚れた大きな両掌にこつぱり握るとよれよれのオーバーのポケットに分けて入れ、先ず親指で、無数の長い毛が覗いている鼻の片方を詰めると、シューと、それも一発で見事に馴れた角度に飛ばした。そして一つ取出し皮を剥くと袋のまま胃袋へ。進も蜜柑をやらかした。

太い柱2本を土台にした焚火は、パチパチと火の粉を上空に舞い上げめらめらと燃えていた。

そこへ、進の横に、黒いスキー帽に、オーバーの上からリックサックを背負った一目で汽車待ちの客と解る男が割り込んで来た。

「お寒いやおまへんか。ええ焚火だんな。一辺あたらしで貰お。寒い時は焚火に限る。一番の御馳走や。」

と、一人言を喋りながら屈むと、両掌をサーサーと擦って突き出した。

そして、今闇市で買ったらしい一束の手巻き煙草をポケットから丁寧に取出し、はじかんだ爪先で長いことかかって中の一本を抜き取る

と、足下の屑木で火種を手前に掻き寄せ火をつけながら、又一人言を喋った。

「時節も無茶苦茶に変わって来た。金さえ出せば何んでも買えるが、それにしても金の値打のないのと来たらどうや。戦争に負けるとこんなになるものかな。」

二つ目の蜜柑を食べ終った焚火屋の親父は、懷に手を入れりばり掻きながら、スキー帽の男に、誰でも始めての客に対する礼儀を向けた。

「もし、焚火にあたるのを無料と違ひませ。」

「え？」いい気分になつて煙草を吹かしていたスキー帽の男は、はつきり聞えなかつたのか、キョトンとして親父を見た。

「金がいりまんのや。」今度は、パスではつきり言つた。

「金があるの、焚火にあたるのに？」金があると夢にも思つていなかったスキー帽の男は、眼をばちばちさせた。

焚火を取り巻く連中はゲラゲラ笑つた。

親父は、上手に撮み出して来たコロコロ肥つた虱を、プチリとひねりつぶし、なきがらを焚火に弾くと、

「そうでんが。わしかて、この木を集めるのに丸一日かかりまんのやで。苦勞して寄せて来た木ですわ。その辺で焚火している連中も同じことで、無料と違ひませ。」

と、彼は隣社の横、遠く阪神ビル周辺の鬧市で人が輪になつて焚火を取り囲む方向を指した。

「ほんなら、何ばのあたり賃だんね？」スキー帽の男が、不服そうに聞く。

「何ばときまつておまへん。心附でよろしおま。ここにあたつてい

る人にも、心附は出して貰つてまんのや。」

「そつちはよう分つてても、何ばか言うて貰はんと、出しようがないがな。」

「何ばでも結構でせ。そないむつかしいことおまへん。」

「むつかしい言うたかて、名前の分らん子供に名を呼べ言うのと一緒や。何ばか言うて貰はんと分らん。」

進は、いたつて金放れの悪そうなスキー帽の男が嫌になつて、横目で睨んでいた。焚火をあたる連中は、スキー帽の男を見下して笑つていた。

親父の燃える黒い瞳が光つた。彼の勦に触れたのである。焚火の中を掻き廻していた棒を無難作にほうり込むと、開いた鼻をつり上げた。

「それやつたらこうしまよう。この寒い晩に焚火がなかつたとしなはれ。駅の待合い言うても火のけはないし。うろろしている内に寒さが辛抱出来ず、闇の物でも食べるとか。それにもし風邪でもひいて見なはれ。それでこの焚火があんたの軀にどれだけの値打をつけよつたか。それだけの心附けでよろしおま。しかし値打がないと思つたらびた一文もいりまへんで。」

「む、む。」

スキー帽の男の咽仏がコクリと下つたのを進は横目でとらえた。

顔の造りから全体が小じんまり出来ているスキー帽の男は、線香のような手巻煙草をくわえると、襟の小さなオーバーの内懐へ手を入れた。頸をかしげ、臉をしばしばさせている様子から見ると、手探りで金の勘定をしているのに間違ひなかつた。やがていくらか取り出すと、もう一度たしかめて親父に差し出した。

当然の権利のような顔で受取った親父は、金に目もくれず無愛相にポケットへねじ込んだ。

進はリックを肩掛けて立ち上った。そして、立ち売りのパン売り、煙草売り達が声を囁して売る間をぶらぶら通り抜け、随行社の横で出張る中国人の屋台店の飯屋で皆と交じってカレーライスを食べる。

夜が深けるにつれ冷えが肩に鋭く切り込む。ぼつり、ぼつり降っていた小雨が、剃刀の刃のようなキラめくみぞれに変わって頬を刺す。カレーライスを食べ、随行社の脇を伝って駅の玄関口へぶらぶら向

った。右に曲ると、ずらりと右側の脇に、新聞紙の上に蜜柑をいくつにも積み重ね、その前に寒そうにしゃがんだ売り達が盛んに声を囁らしていた。玄関口から、子供連れの旅行者とか、一人一人が出て来ると、蜜柑の前を何度も物色して歩く。その内彼らの気に入りの盛りのよさそうな蜜柑が見つかる、立ち止まって買って旅行用のリックサックに詰るか、両手に抱え玄関口の中へ吸い込めて行くのであった。

進はその蜜柑売りの前を通って、玄関口の端に座る顔馴染の靴磨屋で暫く遊んだ。

暫く彼も靴磨を手伝ったりして立ち上ると、又ぶらりと玄関口を横切って西出口の方へ向った。ここにも脇に蜜柑売りが並ぶ。更に進むと、端っこで、ゴム長の、駱駝の角巻を頭からすっぽり被る、東北かそれとも北陸あたりから来販したのか、骨格の太い婆さんが、孫らしい十才位の、ゴム長の女の子を角巻の下の小脇に抱え、中央郵便局方面からビュッと吹きつける冷風で臉をしばたき柳行李に腰かけていた。

進は何げなく婆さんの前を通り過ぎて考へた。あの婆さんは汽車待ちでなく、たしか闇物賣を売りに来たのに違いない。婆さんの風体で

彼はそう直感した。

数日前もこんなことがあった。今晚のように玄関口をうろうろしている、何か一杯きつしり詰ったリックを背負った男が、駅の中に入ったり出たり、それともかなりの時間同じことを繰り返しているの近寄って事情を聞いてみた。言葉は訛のひどい津軽弁であったが、訳は、青森からリングを売りに来たが、闇市の凄じい様子に気を吞れ困っているとのことであつた。彼は、それならおれが売ってやると言って正面玄関口でリックの紐をほどいた。何と数年来接したことのない見事な真赤なリングが現れたのであった。リングはその場で三十分もかからぬ内に売切った。そして彼は謝礼金を買ったことがあったのである。

進は膝でウトウト眠る子供を抱える婆さんに近寄った。

「お婆さん、その行李に何か売る物があるの？」

と、尻の下の柳行李にちらりと視線を投げて、思い切つて聞いた。見知らぬ若い男がのこつと目の前に立つて、心安く声をかけたので驚いた婆さんは、子供を抱えた腕に思わず力を入れ、どきまぎした様子であつた。それでも、善良そうな微笑を浮べた眼で見上げ、周囲を気にしてそつと答えた。

「スルメだべ」

「スルメ？」

「うん。」

「お婆あさんは何処から来た？」

「北海道の江差だべ。」

「えッ、北海道。」

こんなよばよばの年寄と子供がはるばる北海道からと、今度は進が

二人を見張った

事情を聞くと、やはり彼の思った通りスルメの大阪への売込みであった。だが、婆さんも青森のリンゴ売りの男と同じく、行李を背負って大阪駅を出て闇市へ来てみると、北海道ののんびりした人間と違って、何処もかしこも気ぜはしい人間の叫ぶ群れに圧倒され、年寄と子供ではとても商売が出来ぬ、このままスルメを背負って北海道へ帰ろうかと思案しているところであった。

進は売ってやる約束をして品物を見せてくれと言った。喜んだ婆さんは、子供を起し角巻を持たすと、ぎこちない動作で行李の縄をといった。

すばっと蓋が取られた。白い粉が霜のように吹き上って、肉の厚い黄金色の素晴らしい剣先スルメがぎっしり詰り、生嚙でも出そうな味覚の蕨を満満と放っていた。

目の醒るような剣先スルメを眠げ眼で見た進は、東出口、阪神ビル裏附近、アベノ橋附近の闇市と歩き廻って来たが、こんな見事なスルメを見たことがなかった。

「何ばで売のや？」

「三枚十円でどうか、高いべ。」進の顔をうかがって聞く。

高いも安いも今は相場はない、何でもよい、珍しい品物であれば人は飛びつくのだ

「売れる。」

彼は行李を抱え上げると、明るい正面玄関口の、駅の中寄りの中央にずしんと置いた。顔馴染の靴磨屋がす早く見て取る。すでに人が寄ってくる。近寄ってくる人におどおどしながら婆さんは、一束（二十枚）を結んであるスルメの足をほどいて進に渡す。進は札ビラのように

に三枚広げ高く差し上げて叫んだ

「おーい、こんな剣先スルメ見たことあるか。見たことがないやろ。このスルメは北海道の江差のスルメや。どこの闇市を廻ってもこんな本場のスルメは見当らんぞ。三枚で拾円や。買うのなら今の内や。この行李一杯で後はないぞ。」

売れる。売れる。羽根がはえたように売れた。駅で商売を禁じに来る駅員迄が、帽子と上衣を脱いで、皆に交じって手を延ばしていた。

汽車待ちの旅行者の何人も列から放れてとんでくる。パン売り、蜜柑売迄が買いに来る。靴磨屋も延び上っていた。こうした、群集心理も手伝って、駆け寄る人で黒山になった。

婆さんは、進から受取る金を入れるのと、束のスルメの足をほどくだけで、ばたばた汗を落していた。ゴムマリのように太った可愛い孫も、角巻きを蓋に投げ入れ、行李のわきにしゃがんで、艶々する真赤な頬をほてらせ、スルメの足を解くと言っても、ひきちぎって進に渡していた。

ぎっしり行李一杯詰るスルメは、一束残してまたたく間に捌けた。

売上げはたしか数千円はある。婆さんは、残った一束のスルメと謝礼金を進に握らせた。そして、おらは二度と大阪へ来ないが、一度江差へ遊びに来てくれ、家は漁師で、今晚の恩返しにスルメ一束十五円でいく束でも分けてやると原価を打明けた。スルメ一束二十枚が十五円と聞かされた進は何ぼの儲けになるのか急に計算が出来ぬ程驚いた。和歌山から重いリッスを背負って一山十円で売る蜜柑売りと問題にならない。北海道は遠い恐い処と子供の頃よりそれしか知らないが、こんなよぼよぼの年寄と子供がはるばる大阪迄商売に出向いて来ているのではないか。そうだ、消防を止めてもよい、北海道へ渡ろ

う。でないと、今の状態では悦子達を大阪へ呼べそうもない。彼は、婆さんから住所と氏名と、江差駅から遠く放れた海に面した、彼女の家の地理を詳しく聞いて、消防手帳にしたためた。

二

大阪駅に北陸線廻り青森行がのろろと入って来た。窓ガラスはどの車輛も見事に割れていた。列車が入って来る迄行儀良く並んでいた乗客は、制止する職員を突き飛ばし、まだのろろ動いている列車めがけ、蜘蛛の子を散らしたように殺到した。皆買出し部隊である。

蜜柑の買出しで鍛えられていた筈の進は、青森行の乗込の凄じい勢いに弾き飛ばされ、入口を求めて右往左往した。ひしめきあうどの入口も、どの窓も、リックを背負った閑屋が群がってわめいていた。

青森行きは大阪ですでに満員になり取り残されることがしばしばあるので、彼らは乗り込み死にもの狂いであつた。とにかくどんなことをしても乗車すればよかった。

うろたえた進は、どの窓から飛び込むか、横目で眺めながら機関車の方に駆けた。幸い一輛目の窓口がわりとひっそりしていたので、それに向って竊進した。一輛目の横で、白墨を持った逞しい半長靴の、毛皮のついた航空服の男と、その左右に同じような服装の男二人が、助役と職員相手に何か激しい口論を交していた。進は彼らの横を駆け抜けて空いている窓に突進した。客車の青森行の札の横に白墨の遺筆で、朝鮮人専用列車と横に書かれていた。進の眼に大きく写ったが、夢中でその上の窓に駆け登った。懸命に足をバタバタさせ頭を入れてかけているのに、長い手が彼の頭を力まかせに押し退けた。彼はホームに突っ立って、むっとして睨んだ。

「朝鮮人か？」突いた男が、朝鮮語の知らない朝鮮人か、訛のない日本語で聞いた。

「朝鮮人だ。」むっとしているので、まごつかず答えた。

「よし、入れ。」

今度は手が延びて簡単に飛び込めた。

車内は通路が開いているだけであつた。幸い反対側の椅子に一人座るだけ空いていたので、リックを膝に腰かけ、握飯の入れてあるぎつこのうと、水筒を椅子の手摺に掛けた。発車のベルが鳴った。助役達とやりとりしていた航空服の男達がサーと窓から飛び込む。車はのろろ動く。敗戦で陰鬱にすばんだ日本人 遅って、日本帝国主義の長年の鉄鎖をたち切り、祖国の独立の喜びにひたる彼らの頬は生々して明るかった。部落内で朝鮮人と生活を共にしてきた進は、卑屈になり切っていた彼らを良く知っていた。この彼らの変化の原因が理解出来なかった。また逆に、今度の戦争で負けていなかったらお前達に今日のような態度を取らせなかったであろうと、肚で罵るのであった。

ガラスのない窓のかわりに鉋戸が下され上に張った布をハタハタさせて列車は走る。車内は笑声の渦で充滿した。誰か朝鮮語で甲高く喋ると、どつと一斉に笑った。又誰か朝鮮語で喋ると、立ち上って朝鮮語でやり返す者がいてそれでどつと笑うのであった、恐ろしく騒々かであった。後部の一組から朝鮮民謡トラジが歌われると、彼らは一斉について歌うのであった。民謡はアリランに変わった。それも一斉に歌われた。

進は咽がからからに乾いていたのでリックから蜜柑を取り出した。先づ、楽しそうに歌っている前の二人と、隣の朝鮮人に三個づつ分けやう。

「ありがとう。」

「済まん。」

列車が山崎駅を通過した時、蜜柑を食べ終った進の向いの、少ししやくった面長の朝鮮人が微笑して話しかけた。

「あんたは日本人やろう。」太い種やかな声であった。

「……」見透かされた進は、どきんとして彼を見た。

「私達の仲間で日本人になろうと思つて帰化する者がいますが、朝鮮民族の風貌は隠せないのと同じことですよ。ハ、ハ、ハ。」

「……」進は無言で薄笑つた。

「何処までです。私達は新潟までです。」

「北海道です。」

「北海道に何か珍しい品物でもあるんですか？」

「さあ。」スルメのことは話せない。

「遠い買出しは一人で行きなさんな。組で行くことですよ。」

列車は京都駅に滑り込んだ。此処でも乗客は散を乱て殺倒した。しかし青森行の乗車はたいてい大阪迄出向いていたので、大阪駅程でなかった。ホームは大阪駅と反対であつたので、航空服の三人はす早く窓より飛び下り、白黒で朝鮮人専用列車と書いた。すると、朝鮮語で叫びながら各窓よりどしどし崩れ込んで来た。進達の窓からも飛び込んで来る。通路はたちまちぎつりと詰つた。何処かの窓ガラスの破れる派手な音がする。列車はまもなく京都駅を発車した。もうこれから先で止る駅では絶対に窓を開けないつもりで、錠戸とか窓ガラスを閉めるのであつた。

トンネルに入ると、煤煙が、火事場の煙のように入ってくる。皆は口にタオルとか、帽子をあてがって伏く。長いトンネルがつづいて、

やがてパツと明るくなると一斉に窓が開けられた。

それから暫くした時であつた。後部の方が急に騒がしくなつたので進は振り向いた。

白い毛皮の航空服の男が、せっかく座っている乗客の一人を椅子から引張り出し、次の車輛に連れて行くところであつた。日本人がまぎれ込んでいたからであつた。次の車輛は、デッキ、洗面所の中、便所の中から通路にかけてそれこそ立つた姿勢で身動き出来ぬ程ぎつり詰まっているのである。航空服の男が引き返して来ると、二人の航空服の男を連れ、左右の椅子に座る彼らの顔をジロジロ眺めながら調べ始めた。そして日本人らしい男を見ると、朝鮮語で話しかけるのであつた。言葉の意味が通じないと、片端しから引張り出すのである。通路にも若干まぎれ込んでいた。その内進の方にやって来た。進は心臓をドキドキさせ。向いのしゃくつた顔の男を見た。

彼は微笑を向けた。

「任かしておきなさい。」

白い毛皮の航空服の男が朝鮮語で進に話しかけた。進は彼を見上げるだけで言葉の意味が解る筈がない。

しゃくつた顔の男が、朝鮮語で何か彼に言つた。二人の間で短い言葉が交わされる。白い毛皮の航空服の男は領いて前方へ向つた。窓のわきに向いて座る二人の朝鮮人は微笑して見た。

しゃくつた顔の男は、動揺する進に嘲笑んだ。

「貴方と私は義兄弟になりましたよ。ハ、ハ、ハ。」

終着駅青森に着いた。窓から、端っこに雪が積るホームに飛び下りた進は、棧橋に向つて駆け出す乗客に交じつて駆けつけた。四列に並ばざれ待っていると、番号の入つた乗船名簿を貰う。しかし連絡船は猛吹

雪のため欠航がつづき、混雑していた。進は乗船に時間があるので駅の外にぶらりと出る。青森も戦災を受け駅の周囲一帯は広漠たる銀世界になっていた。何にもないのと、凍てる寒さですぐ引き返して来た。

荒れ放題の棧橋の塀とか柱を取り外し焚火をして待つこと一昼夜にして、乗船の順番が廻って来た。船に乗る前に、アメリカ兵によって、頭髮の中から、背中、懐、股ぐらにかけて、DDTをいやという程撒かれる。

三等船室は、毀れた便所の糞尿の臭いがただよい、たちまち煙草の煙が充満する。睡眠不足だった。笹の小芋のようにきらきらに挟れ、エンジンの子守唄でぐっすり眠った。

ものうげに呻く汽笛と、周囲がわさわさするので目が醒めた。船は函館棧橋に横づけになろうとしていた。急いで服装をととのえ、皆に交じって甲板に出る。いよいよ北海道に來たかと思うと胸がはやつた。船は横づけになったが、艀を切り裂くような寒いなかを長い間待たされた。アメリカ兵の幹部がやって来て、そこで始めて下船の許可が下りた。

北海道は、聞いていたのと、事実とでは大きな相違であった。かもめ乱れ飛ぶ港には、風波に揉れてひしめきあう多数の機帆船に漁船。それを見下す、白雪に夥れる、牛が眠っているように見える函館山。樹木が黒い針のように見え、その頂きのキラキラする空は締りたてのミルクを流したようである。

橋馬車が、たくさんついた鈴をリンリン鳴し走って行く。刺繍のように凍てつく雪の上を滑り止めの下駄をきしませて行く角巻きの若い女。駅前の広場で、小さな竹の橋で滑って戯れる子供達。氷柱の下

る美しい函館の街と、この異国的な情景に魅せられるのであった。すると、戦死した親友の文学青年栗木が、生前よく口ずさんでいた石川啄木の歌が思い浮ぶのであった。

函館の青柳町こそ悲しけれ、

友の恋歌

矢草の花。

江差は混布の産地でもあった。駅から広い一本道になっている雪路を、粉雪の中を手帳の地図を頼って暫く行くと家はすぐ解った。大海原に面した一軒家であった。婆さんは大喜びで彼を迎えた。子供は進を見て覚えていのか頬を染めにつこり笑う。

婆さんは、進をルンペン（ストープ）のわきに座らせお茶を出す。

そして、一目で漁師と解る此の家の主人らしい息子夫婦と、その兄弟達に紹介した。人の好きそうな息子夫婦は、大阪駅の出来事の礼を厚くのべた。婆さんが半乾きのスルメを持って来て、ルンペンの上で焼き、彼にお茶菓、子変りにと言ってもなす。進は、腹が減っていたのと、半生のスルメの味は格別であったので、遠慮なく食べた。その日は婆さんの勧めもあって一泊することになった。

翌日、闇米を買って貰い、どっさり造った握飯をさつのうに入れて、スルメでぎっしり詰るリツクを背負った進は、今度来る時江差で不自由する縫糸、純綿の古作業衣、軍服などを持って来る約束をして、婆さん達に見送られて家を出た。

帰りは、心臓が張り裂けるかと思う程の苦痛がつづく。函館駅で下車と同時に乗客が我れ先にかけて出す。此処でも乗船前に並ばされ名簿

を貰うのである。進は、窓からリックをほうり出し飛び出ると、すぐリックを背負いかけ出し前列の方に並ぶ。列は徐々に進む。進はとうとう階段の中央でへたり込み息をはずませた。やっとDDTを浴せて貰う。それからが又大変であった。重いリックを背負い、長い機橋を滑ったり転んだりして一人でも出し抜いて乗船口に早く並ぼうと思つてかけ出すのである。連絡船は汽車と違つて、どれだけ込んでいても座る場所は何処かに見つかった。

夜。吹雪の青森機橋もアメリカ兵の幹部が来る迄下船出来なかつた。今度は重いリックを背負つてるので息が詰るほど苦しかった。下船して行く連中は、ホームに向つて一目散に走る。滑つて転んで重い荷物で手足をバタバタさせながら起き上れない男もいる。その横をどんどんかけて行く。その様子を、甲板で並ぶ彼らは笑顔も見せず眺める。誰の心も、早く下船してかけ出し早く列車に飛び込みたい一心であつた。

ホームには貨物列車が入つていた。東北線廻り上野行であつた。かけつけた進は、普通の貨物車と思つてちよつと戸迷つた。だが、どしどしもつれて乗り込む客と、下船してかけてくる彼らも我れ先に乗り込むので、それが客車の東北線廻り上野行と解る。しかし切符は北陸線廻りになっているが、そんなことに頓着なくもつれ合つて貨車に乗り込んだ。車内は電燈のない郵便車であつた。中はひしめき合い、罵声が絡んだ。

「てめえらもつと詰めろ。詰めんか。」

「おたんちゃんめ。荷物を下ろせ。」

「押すな。馬鹿野郎。」

「これ以上乗せるな、入口を閉めろ。」

進は、脂汗が滲む程苦しいので、リックを下ろそうと思うのだが、軀が斜めになる程ぎつり詰つていたので下せなかつた。入口が閉まると汽車は発車した。発車して暫くしてやっとリックを下ろせた。下ろしたリックの力で軀がますます斜めになる。そのままの姿勢で盛岡迄つづく。汽車が駅で止まり客が下りたり乗るたびに、キイキイ、ガッガッ怒鳴る様は、まったく貨車で運ばれて行く豚の群れとちつとも変らなかつた。

上野駅で下車して、省線に乗りかえ東京駅へ向つた。東京駅の糞と小便臭い塵々の地下道で、大阪行に乗る乗客に交じつて並んで待つた。長い旅で握飯を食べつくし腹の減る彼は、スルメを一枚取り出し、リックを横にして腰かけスルメを裂いてムシヤクシヤやらかす。スルメを食べ終つた時背中を軽く叩かれた。

「もし。」

振り向いて見ると、濃い茶色の縁の曲る中折帽子に、緑なしの眼鏡をかけ、白髪の少し交じる口髭の学者風の紳士が、黒オーバーにリックを掛け、トランクに腰かけにっこり笑つていた。

進が振り向くと紳士は笑顔を近寄せ、そつと言つた。

「リックのスルメ、ゴ商売になさるのですか？」

「そうです？」

「それでしたら、少し分けていただけないでしょうか。珍しいので土産に持つて帰つてやろうと思ひますのや。」

「よろしいです。何ほでも分けて上げます。」

「いくらでしょうか？」

「三枚で十円です。」

「そしたら五十円程御願ひします。」

「よろしおま。」

前にぶら下るぎつうと水筒を脇に寄せて立ち上った彼は、ぎつしり詰る、埃で薄黒く汚れたリックを真直ぐ立て、紐を解いてスルメ一束取り出すと、十五枚読んで十円札五枚持つて類笑む紳士に渡す。

「ほう。何と、素晴らしい剣先スルメです。こんな見事なスルメ長年見たことがあります。兄さん、何処のスルメです？」

「北海道のスルメです。」

「江差のスルメ。これは素晴らしい土産が出来た。家の者が大喜びするでしょう。済みませんがもう五十円分けて下さい。」

「はい。」

この二人の取引を眺めていた紳士の両横、その後で並ぶ旅行者達が寄つて来た。

「そのスルメ売るのか？」

「売るで。」

「いくらや。」

「三枚十円。」

「よし三十円分けてくれ。」

「僕も二十円。」

「わたしも二十円分けてちょうだい。」

「おれ十円や。」

ずっと、後の方から数人バタバタかけて来る。前の方からも。地下道を抜けて行く人々も。スルメはたちまち一束スエの土産に残して売切ってしまった。彼は資本がほしいと思つた。資本があれば、機帆船か貨車でうんと運ぶのだが。この勝負の早いばうい味をなめた彼は、大阪に帰れば早速開市で安い衣類を仕入れて、北海道へ飛ぶ肚をきめ

るのであった。

三

焦土の新世界から、此処も焼けてきれいに消え路だけのジャンジャン横丁を通り、関西線の湿っぽいガードを替り抜けると、いつも糞尿の悪臭を放つ共同便所を横眼にして、アベノ橋に続く広い道路に出る。その周辺一帯の空地にも開市が生れていた。至る処で開市が発展して行くと、それに果食うダニ、開市を取締る顔役が生れていた。ジャンジャン横丁では石井組。アベノ一帯にかけて熊虎組が勢力を張っていた。

広い道路を渡ると、遊郭に通ずる飛田本通りの賑やかな商店街に入る。浪曲専門の天王寺館を横に見て進むと、アベノ駅から住吉駅迄曲線に延びる南海線、飛田で一本線と呼ばれている路切に出る。そこを渡り暫く進むと、飛田遊郭大門筋と、左へ飛田北門筋に分かれていく辻に来る。その北門筋に開市が生れかけていた。

哲雄の靴店は、この辻に来る手前の右側の小間物店の隣の角にあった。入口の道路に面した四角い台の上に、大戦争の時にも相手にされぬ残品、色あせた標準靴、豚皮靴、犬皮靴、サメ皮靴、ゾック靴、サメ皮子供靴と、庭の陳列にも埃りにまみれ白くなって並べられ、道行く人々に哀れな声をふりまいてるようであった。しかし、これらの靴は警察の目をくらます看板であつて、裏に廻ると牛皮の開靴がどしどし製造されていた。

小柄でもわさびの利いた哲雄は、頭も鋭く切れた。そして運のいい男で、進と同じく召集にも徴用にも取られなかった。彼は、西浜が焼かれると一時郷里の奈良に帰っていたが、そこは野心に燃える男のこ

とで田舎を飛び出し飛田附近で住むようになった。飛田通りには疎開した空家が多きさんあった。終戦直後、目先の鋭い彼は、現在の家を貸り靴店を張ったのである。

その彼の店へ、西浜が焼野原にされバラバラになった、復員して来たかつての極楽会の若者達が、親友の哲雄が飛田で靴店を張っていると伝え聞くや、そくそく集まって何年振りかの再会で喜びあうのであった。そして、南方方面で生死不明と伝えられている外野とガタロの噂話や、満州から沖繩に廻され戦死した進の兄の勉の話や、彼らの西浜の思い出話を咲かすのであった。

復員して来た昭鷹は一と廻りも二た廻りも大きくなっていた。復員して来ると八五長屋は丸焼、父の関次郎の焼死と、長年の戦線生活で昔の邪氣のない瞳でなく、てかてかに脂ぎる浅黒い頬に、血に飢る狼のような鋭い眼になり、性格も一変して残忍性になっていた。長年の鉄カブトのせいとか、頭髮の真ん中が薄くなり、まだ若いのに中年過ぎの男に見えるのであった。

ある晩、哲雄の家の奥座敷で、昭鷹、八男、三吉、太吉、正二郎、昭雄達がたむろして騒いでいたが、彼らも食っていかなばならずその話に交って来るのであった。

「おい、石井がジャンジャン町で、縄張りを張りよったぞ。正二郎が、何を思っつか出し抜けに言った。

「石井言うたら、普通軍会館の前で喧嘩の相手を刺した、あの石井のことか？」

八男が聞いた。

「そうや。本虫（刑務所）から出て来るなり開市の親分になりよったのや。」三吉が答える。

「どうや、おれらから開市でし、のき（食べる）つけへんか？」より一そう遠しくなって復員して来た太吉が、言った。

すると、ごろりと横になって煙草を吹かしていた昭鷹が、むくつと起き、冷たい眼で皆を眺め廻して言った。

「おいやろうや。昔のようにながちり気い合わして、根生さえ出せば、しのげるぞ。犬でも腹が減って見い、ゴミ箱をあさることぐらい知っとるぞ。」

正二郎の眼が燃えた。

「浜が焼かれ、家もミシンも焼かれ、仕事をしたい気持があつても、それは思うだけやな。」

八男も眼を光らせた。

「おれも家もミシンも焼かれた。おい、飛田で佐藤組、七二組、萩の小政組、浪花組、海野組と、縄張りを張りかけて来てるぞ。キョロキョロしていられんぞ？」

「人数は集まるか？」三吉が聞いた。

「人数に心配するな。進も消防署をやめさされたそうやし、陂の小川にも知らせよう。それと、復員して遊んでいる浜の連中に知らせたら大丈夫集る。哲ちゃんもいるし。」

昭男が張り切って言った。

「それやったら、あしたの晩もう一辺ここに集まってみよう。出来るだけ浜の連中集めて来いよ。」昭鷹がしめくくった。

「よし来た。」

あくる晩は、哲雄と、彼の弟の剣道二段の光雄、丁度北海道から帰っていた進、陂の小川達の外西浜の青年多数が集って、開市のしのぎの話に意見が一致、その会の名詳について色々話し合うのであつた。

た。

「やっぱり、照雄が言つた蘭車会の名前がええ。それにきめよう。」
輪になる彼らの中心で、膝坐を組み、哲雄が、彼の一番悩みの種、年の割りにだんだん枯スキのように薄くなつて行く、薄茶かつた細い頭髪を掻き上げて言つた。

「蘭車会で行くや。」

「それにきめた。」

皆が軀を乗り出すようにして賛成した。

会の名前がきまると、会長の選定になつた。会長は、皆の意見が一致して哲雄に向けられた。

「哲ちゃん、の会長に、誰も文句ないな。」三吉が、念を押すために、

皆に聞いた。

「文句ない。」

「文句なしや。」

微笑する昭磨が、皆を眺め廻して言つた。

「皆んな。これから哲ちゃんて心安う呼ぶな。蘭車会の活はくが落ちるぞ。」

「ほんならどう呼ぶのや、親分と言うのかや。」

進が、微笑する哲雄にわざと向つて言つた。

ワッハ、ハッハ、ハッハ。と、皆が一斉に笑つた。

「別に親分と言わいでも、会長か、おやっさんで呼ぶことにしよう。始めきまり悪いがすぐなれる。しのぎのためや。ハ、ハ、ハ。」

それから数時間、何処の組でも、その組の身内をはつきりさせるパッチのデザインの型で色々と浮んだことを出し合うのであつた。すつたもんだ色々と考へるのであるが、皆の氣に入るような型のデザイン

が現われなかつた。これは闇市を取締るのに大事なことであつた。何処の身内の者か、自分達の縄張りの闇商人達に認識さすためでもあり、場所代の集金寄せに、外部からの侵入をふせぐためでもあつた。そこへ、紙を持った跛の小川がニヤニヤして、ひよつこら、ひよつこらとやつて来た。そして、昭磨の背後の頭越しから紙を哲雄に差し出した。

「これを見て。」

受取つた哲雄は、バサバサバサと紙の皺を延ばして見つめる。一銭銅貨大の蘭車の絵が画いてあつた。

「蘭車やなや。」

「そうや会の名前と同じや。蘭車は一個で廻るものと違ふ。互いにがつち合つて始めて廻るのや。それで、団結のシンボルにもなると思つてな。」

「ふむ。」哲雄は又呷つた。

紙は光雄から順々に廻される。蘭車のデザインは彼らに大變氣に入つた。

どのくらい人が集るか、昭磨、三吉達と計算していた哲雄が言つた。

「よし、パッチの型を蘭車にする。早速四十個あつたえよう。」

こうして、大戦争により職場を奪れた若者達の谷間の生活が、飛田北門筋の闇市を足場にしてくりひろげられて行くのであつた。

蘭車の絵の下に蘭車会事務所と書かれた看板のかかる哲雄の店の前を、交交する人々が頸をかしげたり、カラカラと笑つたり、立ち止つて目を丸くして読んでブツと吹き出す者とか、この奇妙な珍しい組の名称の看板を眺めて通つて行くのであつた。

事務所の中は若い者で賑わっていた。その中から、集金係の跛の小川が、揃えて造った進駐軍の略帽に似せたいきな帽子を、丈夫な足の方に横つちよに被って、胸の胸車のパッチをキラキラさせ、ひよつこらひよつこらと出て来た。

ひよつこら、ひよつこらと北門筋へ曲ると、かかりで電気器具を売る闇商人の前に立った。

「おっさん、シヨバ代。(場所代)」

凄みのあるやくざに見せねばならず、色白の優しい顔に似ず、無理に眼を鋭くして、ぐっと睨みすえて言った。

彼が、片瀬波のようにひよつこらやって来る姿をす早く見る闇商人は、すでに場所代を用意して待つのである。

「兄いさん、ごくろうさん」

領いて金を受取ると、立ち売りしている男女を問はず片端しから順々に金を集めにかかった。見る見る内に彼の左手に十円紙幣の束が出る。

「小魚一匹逃さぬ投網のように片端しから集金して、遊郭に入る北門迄やって来た。遊郭寄りの路の真ん中で一目でやくざと解るチンピラが四五人たむろしていた。飛田遊郭には、大阪市内とか全国の至るる処で殺人、強盗、留置場破りとか、事件をまき起した連中が必ずと言ってよい程流れ込んで来ていた。その彼らは、土地の顔役、つまり闇車会の身内の前には、どれだけの前科の肩書きのある強者でも卑屈になっていた。そうでないと彼らに嫌はれでもすると隠れおおせないのである。又、闇車会の身内も彼らを大事にして近寄りしきをついていたのである。と言うのは、彼らは遊郭に流れ込む前に一と仕事をしていた。握っていた現金を握っていたからであった。全国の警察の捜査網も

ここに向けられ、犯人検挙のための多数の腕利きの私服も送り込まれていた。とにかく複雑な地域であった。

「兄貴、こんちは。」

「こんちや。」

チンピラやくざどもが頭を下げ小川に挨拶を送る。

あいつらはよくここで見かけるが、何処の身内のか、(まだ子供)か？彼らにちよつと横眼を流しただけで、お前らみたいなチン

ピラ野郎に兄貴と呼ばれても挨拶なんかするものか。貫禄が違うと言ったような顔附きで、コンクリートで遊郭を囲う塀の角で石鹼を売る片目の闇商人の店の前にひよつこらと立った。

片目の親父は、大きく顔を廻して小川に向けると、何か胸に落ちぬような顔附きで頭を下げると、金を出す気配はみじんもなく何知らぬ顔をするのであった。

彼はむつとして、片手を突き出して言った。

「おっさん、シヨバ代や。」

「えっ場所代？」

「そうやが、おっさん何ばけてんのや？」

「場所代なら、さっき胸車の兄さんが集めに来たので渡しました？」

「何ッシヨバ代を集めに来た？」

さつと厳しい顔になった。「体誰が集めに来たのか？こんなことはかつて一度もなかったのだ。彼は知らぬ内に、年期の入った新聞配達がよくするように、握っている紙幣をしごいていた。

「集めに来ました。つい今さっきです。」

「どんな奴が来た？」

「航空服を着た、体の大きい、兄さんと同じ帽子を被っていました。」